

# バイバイ・ブラックバード

作・演出 萬野 展（押田鉄生名義）

## 登場人物

- 水内 京一 囚人。三十三歳。（押田）
- 権田原 均 囚人。二十七歳。（松村）
- 山田 宗介 囚人。二十八歳。元漫才師。通称「セブン」。（福島）
- 坂東望太郎 囚人。三十一歳。B.B。（森山）
- 栗木田一蔵 囚人。五十五歳。元外科医。通称「教授」。（住吉）
- 蒲郡 封太 囚人。三十歳。元フリーライター。（山根）
- 松本 治彦 囚人。二十六歳。（籬）
- 木川田隆二 囚人。二十六歳。元ビデオカメラマン。（中越）
- 平山 二郎 囚人。三十九歳。元傭兵。（嶋田）
- 大久保零次 囚人。八十九歳。（小川）
- 日吉 真一 囚人。二十五歳。関西人。（松井）
- 安岡 鉄矢 囚人。二十三歳。（戸嶋）
- 水内 美香（精神科医1） 十五歳。女子中学生。（枝見）
- 松田沙也華（精神科医2） 四十歳。賄い婦。（梶原）
- 栗本小夜夏（精神科医3） 二十一歳。アイドル歌手。（和田）
- 小山 則子（精神科医4） 十九歳。愛人。（片岡）
- 絵島 史（精神科医5） 四十七歳。刑務所長。（松沢）
- 瀬戸美津枝（精神科医6） 二十六歳。ダンサー。（高橋）

## ACT・01 山頂の囚人

静かである。  
 暗闇から、人の気配が漂ってくる。  
 息使い、唾を飲み込む音。  
 数人の人間が身を寄せあつて固唾を飲んでいる、そんな気配が伝わってくる。  
 深く息を吸い込む音。  
 そして

複数の声 … ヤッホーオオオオオオオオオオ…

声は吸い込まれて消えてゆく。  
 その余韻の中非常にゆっくりとあたりが明るくなり始める。  
 五人の囚人服を着た男たち。  
 山田、水内、日吉、権田原、板東。  
 非常に高い山の頂上に、今、彼らは到達したのだ。  
 限りなく広がる空間の、文字どおりの限りなさに彼らは口もきけないほど感動して  
 いる。  
 それは、山頂に到達した達成感や満足感からくる感動ではない。  
 それほどの高みに登りながらも、なお自分たちの頭上に無限とも言える空間が、果  
 てしなく広がっているというその事実が、彼らを圧倒している。  
 彼らを打ちのめしているのは空間の広がりそのものなのである。

水内 ひろいな。

問。

権田原 …うん。

問。

日吉 …ひろくて…高いな。

問。

山田 …なんにも無い、なあ…

水内 ああ。

彼らとはとにかく言葉を失っている。  
 「なにもない」ことのインパクトがあまりに強烈で、そのことを口に出すことすら  
 無意味に思える。

権田原 (小声で) ヤッホー

おそろおそろ、囁くように、確かめるように口にしてみる。  
 彼らの感動は無力感と原始的な畏怖から成り立っているのだ。

板東 (同じく小声で) ヤッホー

日吉 (同じく) ヤ、ヤッホー

山田 (やや大きく) ヤッホー

水内 ヤッホー!

囚人たち ヤッホー! ウオー! コノヤロー!

五人、徐々にエスカレートしていき、口々に喚き出す。  
 しばし訳の分からないことを喚き尽くして、彼らは黙り込む。  
 空気が薄い。

日吉 ……こんなに広がったんやなあ、世界は。  
権田原 ……ああ。

山田 空が…（泣き笑いのような顔で）…まあいや。  
間。

水内 おい。  
板東 ……どうした。

水内は呼んだきり黙っている。  
板東もつられて黙る。

権田原 なんだよ。

権田原は水内と板東の視線を追う。  
かなり上方を、彼らは見ている。

権田原 あ

水内たちが見ているものを権田原も見つける。

日吉 なんや？

権田原は無言で遙か上空の一点を指す。  
日吉と山田はその指先の示す方角を追う。

日吉 なに。

権田原 あれ。

日吉 ……？（見つけれない）

権田原 ホラ、あそこ。…黒い点みたいなの…ゆっくり動いてる…。

二人もそれを見つめる。

山田 （ポカンと口を開け）…。

彼らの視線は遙か彼方の、天蓋の一点に張りついて離れない。  
微動だにせず、それを見つめている。

日吉 あれは…鳥…か？

権田原 ……鳥だ。（見上げている）

権田原の言葉に一同は彼の視線を追う。  
はるか上方にそいつは動いている。

山田 ……鳥…だ。

権田原 鳥だよ。

日吉 こんな高い山の上のそのまたあんな…（うまい言葉が見つからず口だけパクパクしている）

一同、口をあげて黒い点に見入っている。

日吉 ヤッホー（再び小声で、鳥に向かって）

権田原 ヤッホー（鳥に向かって、同様に）

山田 ヤッホー！

囚人たち。再び鳥と思われる黒点に向かって声を限りにわめく。

日吉 ……聞こえとんのやろか。

権田原 まさか…。

日吉 あれ、なんの鳥やろ？

権田原 さあ…。

日吉 空気あるんかいな…あんなとこに。

権田原 さあ…。

日吉 えらいこつちやなあ…

間。

山田 オレ…生きてるんだなあ…。

男たちの胸にその言葉が染み込む。

日吉 ……生きとんねん。なあ。

権田原 ん。

山田 生きてるぞ！

生きてる、という言葉に触発され、再び彼らは叫び出す。  
叫びずにはいられない衝動が、ときおり波のように襲ってくるのだ。  
板東が崖から落ちそうになり、慌てて他のものが支える。

日吉 (叫び疲れて)…アホちゃうか、俺ら。

権田原 感動してるんだよ。

日吉 感動すると人間、アホになるんかなあ。

山田 こんなに感動したことないよ、俺。

権田原 泣くな泣くな。

山田 だってさ、空が、空がさ…

板東 いつも鉄格子ごしの空しか見てないからなあ。

日吉 そや。外に出たって狭くなるしい猫の額みたいな庭からこんな(指で四角を作る)  
額縁みたいな空しか見えへんもんなあ。

板東 まったくだ。

山田 空が丸いんだぜ…畜生…(まだ涙ぐんでいる)

権田原 泣くなつて…俺まで泣けてくる。

日吉 アホやなあ。

水内 まるで夢だな。

水内のなにげない一言に、一回の動きが止まる。  
全員が水内を見る。  
その顔は仮面のように無表情になっている。

水内 な…なんだよ。

日吉 オマエ、それ言うたらアカンやろう…

ジリジリ…と現実的なベルの音がどこからともなく鳴り響く。  
あたりは急速に明るくなっていく。  
山田、日吉、権田原、板東は、糸で引かれるように水内を残して散ってゆく。  
後方につつすらと、鉄格子が見え、囚人たちはその向こうへと帰ってゆく。  
現実が舞い戻ってくるその間際、娘が一人、水内を見ている。  
水内はその娘の顔を良く知っているような気がする。  
しかし思い出すことは出来ない。  
夢は覚め、そこは刑務所である。

暗転。

## ACT・02 脱獄計画

暗転明け。刑務所内である。  
所長と新入りの囚人蒲郡がいる。  
後方メイン舞台には、囚人たちがいる。

所長 鮎坂刑務所へようこそ。わたくしはこの所長をしております絵島史といま  
す。絵空事の絵、大島の島、フミは歴史の史です。

蒲郡 あ、ご丁寧に、どうも。(口の中でフツフツ)

所長 もう一度念を押しておきますが、いわゆる志願囚というのはここでは初めてのこ  
となんですよ。いわば特例です。くれぐれも問題などおこさぬように。いいで  
すね。

蒲郡 はあ。

所長 あなたのように、取材のために体験入所しようなどという申し出は、普通の刑務  
所ではまず許可されません。当刑務所は民主的で開放的な新しい時代の刑務所を  
目指していますから、特別に入所を認めるんです。

蒲郡 はあ。

所長 ご承知のように所内には様々な罪を犯した受刑者たちがいます。あなただけを特  
別扱いはすることはできません。あなたは他の囚人たちと全く同様に扱われます。  
いいですね。

蒲郡 …結構です。

所長 それでは簡単ですがわたくしから入所にあたっての注意を申し上げます。刑務所  
の生活で大事なことが幾つかありますが、その中でも特に大事なことがひとつあ  
ります。

蒲郡 …

所長 それは規則ということですが。在鑑者の皆さんにとっても、またここで働く職員に  
とってそれは同じです。わかりますか。

蒲郡 はあ。

所長 所内の規則は先程お渡しした『所内生活の心得』という冊子に詳しく書かれて  
いますのでこれをよく読み、分からないことは進んで職員に相談してください。  
そして一日も早く健全な社会人として社会に復帰できるよう、明るく、正しく、  
強く過ごして下さい。いいですね。

蒲郡 …はい。

所長 …言うまでもないことですが、刑務所のなかといえども、あなたの人権は保護さ  
れます。ただし。

シロリと蒲郡を見て、いつそう厳しく

所長 それはあくまでも制限された人権です。在鑑者の生活は、鑑獄法令の規定に基づ  
いて自由が制限されています。外の世界での自由とは違うのです。そのところ  
を八キ違えないように。わかりましたね。

蒲郡 はあ。

所長 (声を和らげ)とまあこんな具合にここに入ってくる人たちには最初にお話をす  
るわけですね私は。参考になりましたか。(偉そうな態度)

蒲郡 …。は。とても。(卑屈な態度)  
所長 結構。それでは、同室の皆さんと仲良く。

所長退場

蒲郡はメイン舞台に入る。

蒲郡 (囚人のひとりに) ええ、ごほん、ええ、お初にお目には掛かります。ええ、私今日からこちらにお世話になります蒲郡と申します。以後よろしく…  
平山 …。(壁にもたれたまま動かない)

蒲郡 …。(安岡に) あの、蒲郡と申します。よろしく申し上げます。

安岡 チツ。チツ。チツ。チツ。

蒲郡 あの…

安岡 しーッ!

蒲郡 は? は?

安岡 時間がね、分からなくなるから。

蒲郡 はい?

安岡 チツ。チツ。チツ。チツ。

蒲郡 …。

山田 そいつはね、時計なんですよ。

蒲郡 時計…(山田に) あ、蒲郡と申します。よろしく申し上げます。

山田 バカヤロウ。(と胸のあたりを軽くたたく)

蒲郡 は?

山田 (独り言で)…なんか違うな…バカヤロウ…(素振りする) バカ、バカヤロウ…

蒲郡 あの…

山田 違うだろ。(と頭をはたく)…なんか違うなあ。違うだろ。(素振りを繰り返す)  
蒲郡 …。

なにやら賭け事をしていたらしい板東と日吉のあいだで、喧嘩が始まる。

板東 このヤロウ!

日吉 なんやあ!

山田 わ、ちよつと待った。…ヤス、止める!

騒ぎが看守に聞こえることを恐れて必死にとめる山田と安岡。  
なんの反応も示さない平山。

板東 てめえ、黙ってりやいい気になりやがって…!

日吉 なにいいがかりつけとんじゃ、ボケえ!

蒲郡 あの、わたし蒲郡と申しまして…

山田 いいから早く止める、バカ!

蒲郡も混じって三人で止める。

ようやく収まる喧嘩。皆、氣息奄々。

体力のない蒲郡ははね飛ばされて伸びている。

山田 勘弁して下さいよ…! 看守に聞こえたらどつすんですか!

板東 だいたいこの野郎がイカサマしやがるからなあ…

日吉 してへん、ちゆうに…!

山田 わあ、たった、待った待ったまった。日吉さん、落ち着いて！  
もはや喧嘩のための体力も、それを止める体力もない。

板東 それで…

ややあつて板東が口を開く。

板東 なにやっただって、あんた…

蒲郡 …。(息が上がってまともに返事が出来ない)

日吉 殺しか。せやる。ここにおんのは監獄さつや。

蒲郡 …いや…あの…

板東 ハッキリしろよ、ええ？

蒲郡 …(ようやく呼吸を整えて)がまごおりと…申します…

板東 そんなこたあ聞いてねえよ！

山田 まあ、いいじゃないですか。無理に聞かなくなつて。

日吉 で、あんた、土産は？

蒲郡 は？

日吉 土産は？

蒲郡 いや、あの。

日吉 まさか、あんたこん中入ってくんにテプラちゅうことはないやろな。

蒲郡 いやその。

板東 まったくだ。そういえばセブンのおっさん来たときにもなんか持ってきたもん  
なあ。

山田 ああ、あれは…

日吉 あ、あれや、ピアーヤ。

板東 そう、サントリーモルツ。こんな、こんなちっちゃなやつなあ。二本。

蒲郡 えっ、ビールを。

板東 えらい。どうやって持ちこんだと思う。二本全部、尻の穴の中に入れて来たんだ  
ぞこいつは。

日吉 あれはごつつキツかったやろ思うわ。

山田 いやあ、あの、俺、実は、お笑いの業界にいたもんで、その、差し入れの習慣が  
ついちゃってるもんだから…

蒲郡 お笑い、ですか。

板東 漫才コンビ組んでたんだよ、こいつ。ウルトラ・セブン・イレブンっていう。

日吉 でこいつがウルトラセブン君で、娑婆におんのがウルトライレブン君や。

山田 違いますって。コンビじゃなくてトリオ。ウルトラとイレブンがボケで、僕が  
ツッコミ…

板東 だってオマエ、ウルトラ君はデビュー前に死んじゃったんだろ。

山田 ウルトラ…(思い出して涙ぐむ)なんて死んだんだあ…オマエのボケがなかった  
らオレはどこでツッコめばいいんだ…

日吉 また始まったわ。

板東 で、話の続きだが…土産の話だったよなあ、

蒲郡 …それがそのええと、実は私、痔の気がありまして、その、ちょっと、あまり大  
きなものは…



板東 誰がそんなこと聞いてんだ、タコ。(蒲郡の頭を殴る)

日吉 あんた、娼婆でなにしとったん？

蒲郡 ええと、物を書いておりました。

日吉 えっ、ほんなら、小説家かいな。

山田 えーっ、ホントに？

蒲郡 イヤ、あの

日吉 小説家いうたらあれやろ、あのホレ、あれや、なんやったかいな…

日吉がボケる気配に、セブンはツッコミたくてウズウズして構えている。

日吉 …オマエはなにをしとん。

山田 イヤ、ボケたらすぐツッコもうと思って…

日吉 ボケへんわい！…小説家いうたら、例えば源氏鶏太とか…ええと、森村桂とか…

山田 (日吉をはたいて)…ってそりゃいつの時代のハナシだよ！

日吉 アホ！ボケとんのとちやうわ、無理矢理ツッコんでくんな。

蒲郡 イヤ、あのですね…

板東 つまりよ、刑務所つてところはな、とにかく刺激物はご法度なんだよ。読める本だつてそういうあたりもさわりもなんにもねえもんばかりよ。

蒲郡 なるほど。

日吉 テレビあかんやろ。ラジオは聞けるんやけど、番組の選択権はない、流しとんのはしょうもないやつばかりやしな。酒はもちろん、タバコもあかん。そういうとこや。

板東 だからさ、こいつがモルツ持ち込んだ時はそりゃあもう一大イベントだったわけよ。あのモルツの味は一生忘れねえよ。

蒲郡 なるほど…

板東 あんた、ビールで何が好きだ？

蒲郡 は、ええ、まあ、ビア吟醸とか…ダイナミックとか

板東 なんだとオ？(もの凄い顔で睨みつける)

蒲郡 だからビア吟醸とか…あ、モルツ、好きです。モルツがいいですよ。

板東 (苦悩の表情) そんなビールが出ているのか…。それはうまいのか？ 言え。どんな味がする？ え？ どんな味だ！

蒲郡 イヤ、ビールだから。

板東 なんでそいつを尻に入れてこないんだ！ バカ！

蒲郡 そんな無茶な。

板東 なにが無茶だ、バカ！(再び蒲郡の頭を殴る)

山田 まあまあ板東さん、落ち着いて。

日吉 まあ、オレ、ええこと考えたわ。

山田 なんです。

日吉 土産がわりにな、こいつにお話ししてもらおうねん。

板東 お話しイ？

日吉 そや、ごっつ刺激的なやつな。

板東 …(怖い顔をしている)

蒲郡 (板東の顔を見て) イヤ、私、物書きといつても小説を書いていたわけじゃなく…

板東 (さえぎつて) そりゃいいなあ！

蒲郡 …。

日吉 ええやる。

板東 いいよ！ 日吉、オマエどっか違つと思ってたんだ俺は。…（蒲郡に）やれ。オマエもプロだろ。オしたちに刺激を与えてくれ。そしたらテブラで来たことは多めに見てやる。安岡！ オマエも聞きたいだろ！

安岡、指で時間を数えながらも頷く。

板東 平山！ どうなんだ！（平山、壁にもたれて無反応）…ホラこんなに聞きたがつてる！

蒲郡 イヤ、ですから、私はどちらかというところフィクションでなくて体験記とかそういうノンフィクション的な分野で…

板東 …（非常に怖い顔）

蒲郡 …（座り直して）えー、昔むかしあるところに…

蒲郡はそう始めて、そつと皆の様子を窺う。

山田、日吉、板東、安岡は、息を呑んで聞いている。

蒲郡 ええ…旅の、僧侶がいました…。（思いつきで話を作りながら話している）…まだ若いその僧侶は旅をしながら、世界で一番美しい女性を探しているのです…。坊さんが女探しとんのかいな。

板東 なんか変じゃねえか？

山田 そ…そつりよつて、なに？

日吉 せやから坊さんゆつてるやろ！

蒲郡 なぜ僧侶が女性を探しているかと言つと、えー、それは夢のお告げがあったからでした。ある夜の夢に、老人が出てきて「三界に並ぶもの無き佳人を見出すべし」と命じたのです。

板東 ど、ど、どんな老人なんだ、そりや。

日吉 なんてそんな奴の言つことホイホイいきいちゃうわけ？

山田 かじんで、なに？

日吉 美人のことや！ 黙つとけ！

蒲郡 その老人は、真っ白な髪に真っ白な長い髭、腰には二尺二寸の大剣を帯び、額には三日月の形をした向こう傷、それはそれは神々しい姿で、僧侶にはそれが神託のように思えたのです。

日吉 なるほど、神のお告げつちゆうわけや。（先手を打って山田に）わかるか、神託や。神サンのお言葉ちゆうこつちや。

山田 （既に話のにめりこんでいてうわの空で）うん、知ってるしってる。

日吉 なんて知つとんねん！

蒲郡 …世界一の美人を求め、僧侶は山を越え谷を越え、川を下り海を渡り、長く苦しい旅を続けました。やがて、ある城下町に入る道すがら、後ろから一人の少年が、僧侶に声をかけました。

蒲郡は話につまる。

山田 なんだっていうんだ。その少年は！

蒲郡は必死で考えている。

板東 てめえ、もつたいぶるなよ！ はやくしろよ！

殺気立つ囚人たちに責められ慌てて蒲郡は話をつなぐ。

蒲郡 えー、少年は、えー、僧侶を呼び止めよう言いました。「こんにちは」…。

蒲郡はそつと囚人たちを窺う。みんな必死の形相で聞いている。

蒲郡 「出会った方の健康と幸せをお祈りしています」…。

我ながらベタな展開に蒲郡は観念して後ろを見る。  
みんな真剣に聞いている

蒲郡 (ホツとして) 僧侶は答えました。「私もです。それが私の職業ですから。私は僧侶です」。少年がいました。「えー、そんなんですかあ。困ったなあ。本職の人だったんですね。じゃあ、私も本職で対抗しましょう」「少年は背負っていた袋からピンク色のヒヨコを取り出して言いました。「可愛いヒヨコはいかがですか。長生きします。大きくなりません。呼ぶと来ます。いかがでしょう」「僧侶はいいました。「しかし私は旅の途中。世話をしてやることもできません。せつかくですが…」「少年は言いました。「そうですか残念です。ではこのヒヨコはわたしが食べてしまいましょ」

山田 なにい！ ちよつとまで！ 買ってやれよ！ 可愛いヒヨコだぞ！ 呼ぶと来るんだぞ！ 買ってやられて！ かわりそうじゃねえか！

蒲郡 …僧侶は言いました。「それではヒヨコがかわいそうだ。よろしい。私が買って、誰か世話してくれる人を捜すとしよう…」「僧侶は少年にお金を払ってピンク色のヒヨコを受け取りました。去ってゆく少年の後ろ姿に僧侶は「なんと呼ばいいのですか」と尋ねました。「あーん？」「振り返った少年の顔は、小沢一郎そっくりでした。「なーんだってえ？」「あなたは呼ばは来ると言った。なんと呼ばいいのです」「そーんなこと、知るけえ」「少年はノシノシ去って行きました…。

囚人たちは考え込んでいる。

日吉 どういうこつちや…。

山田 なんて呼べばいいんだ。

日吉 そこが問題ちゃうんか？

板東 難しい問題だな。

蒲郡 えー、仕方ないので僧侶はいろいろに呼んでみました。しかしヒヨコは歩きません。ピーちゃん、ピヨちゃん、トットちゃん、ピンク、ペンキー、モモちゃん、トリ助、ミッシェル、ジーザス、マイケル、伸彦、佐助、カンディンスキー、桃色…。

山田 ヒヨちゃんだ！ ヒヨちゃんにしよう！ 歩け、ヒヨちゃん！

日吉 やかましい！ 黙って聞けや！

山田 ヒヨちゃん…。

蒲郡 知る限りの名前と言つ名前を呼び尽くし、やがて日も暮れ、僧侶は途方に暮れてしまいました。ヒヨコはただただ小首を傾げて、僧侶を見上げるばかりで一歩た

りとも歩こうとしません。疲れはてた僧侶は路傍に腰をおろし、天を仰いで大きなため息を尽きました。「ヒヨコよ、おまえは一体なんという名前なのだ」…月だけが彼を見下ろしていました…。と、その時です。不意に道端の茂みの中で人影が動き、その影が小声で、誰かを呼び求めるように、こっぴつ叫んだのです。「アブラクサス…アブラクサス…！」それは驚いたことに、綺麗な女の声でした。しかしそれよりも僧侶が驚いたのは、今までガンとして大地に足をふんばって動かなかったヒヨコが、その声に応えるように、トコトコと歩き始めたのです。

盛り上がる囚人たち。

日吉 うおお、おもしろなってきた…！

山田 アブ…アブラ臭い？

蒲郡 僧侶は驚きのあまり声もなく、茂みから出てきたその人を見上げました。その人は若い女性で、アラビア風の、体に布を巻いたような服を着て、月の光のなかに立っていました。僧侶の体に電流が走りました。この人だ！ 私が探し求めていたのはこの女性に違いない！ それほどに、月の光の中で、彼女は美しかったです。

囚人たちは声を失って集中して聞いている。

蒲郡 僧侶は、はやる気持ちを必死に鎮め、女に聞きました。「どうしてあなたはその

ヒヨコの名前を知っているのです」と。女はかなしげに首を振り、ただひとつの不思議なことを繰り返すばかりです。アブラクサス、と。女はどうやらそれ以外のことをしゃべれないようだったのでした。僧侶は意を決して言いました。「あなたは世界一美しい女性だ。どうか私の妻となって私の国に来てもらいたいです。…そうして、僧侶と女とヒヨコという奇妙な取りあわせの一行の旅が始まったのでした。

山田 頑張れヒヨちゃん…。

日吉 それ、やめエよ！ 呼ばれてるようで気色悪いわ。

蒲郡 …そして十年の歳月が流れました。

山田 ななな、なにイ！

日吉 ごつつ端折りやがったなあ…。

蒲郡 村に戻った僧侶と女は、幸せな毎日を送っていました。

山田 ヒヨちゃんは！ ヒヨちゃんはどうなったんだ！

蒲郡 ヒヨコも今では立派に鶏になって毎朝鶉の声を上げています。

山田 大きくならないって言ったじゃないか！

日吉 世の中そういうもんや。

蒲郡 そしてある日僧侶のもとに、王様からの使いがやってきました。使いの趣はこうでした。王様は世界一美しい女性を探している。ついではこの村で噂の高い美女を王宮に連れてくるように、と。僧侶は仕方無く妻を連れ

山田 ヒヨちゃんは！

蒲郡 鶏も連れ、王宮に参内しました。ほどなく王様が姿をあらわし、二人に向かっていいました。「くるしゅうない。面をあげい。余はアブラクサス三世である」驚いた僧侶が顔を上げるより早く、鶏は一声鳴いて羽を広げ、あつというまに広間を飛び渡り、王様の肩に止まりました。

蒲郡もいつしか自分の話に乗ってきて、芝居気たつぷりに演じている。

蒲郡　：王様はいいました。「おお、やはりそうじゃ。姫！　そなたはわしのただ一人の娘じゃ！　この十年というもの、探し続けておったのじゃ」「僧侶の目には、王様の顔はどうしてもあの日の少年が年老いた顔にしか見えませんでした。」「たのむ。姫よ。わしのもとに帰ってきてくれ」「しかし女は首を縦に振りません。僧侶は言いました。」「王よ。姫は今では私の妻として睦まじくくらししています。どうかご勘弁を」「王は無慈悲に言いました「そんなた、知るけえ」「僧侶は高い塔のてっぺんに幽閉されてしまいました。…王様はそれから毎日のように姫を説得しました。しかし姫はかなしげに首を横に振るばかりでした。そして、イラだつた王様は、とうとう、言うことを聞かない姫の首をはねってしまったのです。

囚人たち、息を吞んで聞いている。

蒲郡　王様は、姫の首の前に、ポーゼンとしていました。その時、死んだはずの姫の口がかすかに動いたような気が…。王様は目を疑いました。確かにその口はこう呟いたのです。」「おとうさん」「王様はその日以来、王宮から姿を消しました。噂では商人にみをやつしてあてもなく旅をしているということですよ。…そして、僧侶は高い塔のてっぺんに閉じこめられたまま、来る日も来る日も、たつたひとつのことを考え続けました。あの姫は、本当に世界一美しかったのだろうか…。自分は何を果たすことができたのだろうか…。そして百年がたち、今でも朝がくると、必ずあの鶏の鳴る声が、主のいない宮殿に響きわたるのでした…。

一同沈黙している。

蒲郡、即興話の出来に満足げである。

山田　それで、結局その僧侶はどうなったんだ…

蒲郡　ええと、ですから今でもその塔のてっぺんに閉じこめられたまま…

山田　なに！

蒲郡　イヤそついつお話しです。あくまでもお話し…

山田　じゃ王様は？

蒲郡　えっ、王様。おつさまは「えー、実の娘であるところのお姫様を、自分の手で殺してしまつたわけだから…えー

山田　はつきりしろ！　テメエ！

蒲郡　いやあの、お話しですから…

山田　そこんところはつきりしないとテメエ、ブチ殺すぞ…。

板東　セブン。

山田　とめるな！

板東　とめない。

蒲郡　…とめまじょうよ。

板東　蒲郡って言ったっけ、あんた。

蒲郡　はい。

板東　…ここはひでえとこだ。あんただってじきに分かる。俺たちは、長いんだ。だからこのひどさは俺たちが一番よく知ってる。…あいつを見な。

板東、平山を指す。

板東 あいつはな、千人殺してる。  
蒲郡 せんにん！

板東 戦争でな。フランスの傭兵部隊にいたんだ。人ごろしのスペシャリストだよ。向こうじゃ平山二郎っていえば本物の英雄だ。引退して帰国して、こっちでタバコ屋のばあさんを殺しちゃった。どうしてだと思っ。

蒲郡 …。(ただ首を横に振る)

板東 消費税を知らなかった。それではあさんと口論になった。それでカツときてこう(手刀)だ。戦争の英雄も、日本じゃただの失語症の囚人だ。

蒲郡 …。

板東 あいつ(安岡)はな、薬でああなった。

蒲郡 薬っていうと…

板東 麻薬じゃない。ああなったのはここに来てからだ。新しい抗ガン剤の投与実験でああなった。

日吉 実験囚ちゆうやつや。

蒲郡 実験…そりゃ、人体実験じゃないですか。

板東 信じられないか？ でも事実だ。ここじゃ本人の承諾があれば出来るんだ。

蒲郡 なんてそんな承諾なんか…

板東 看守の受けがよくなるんだ。あいつ、苛められててなあ、怖かったんだろ。少しでも気に入られたかったんだろうなあ。言われるままに承諾書にサインしちゃった。もともと気の弱いやつでな。まあ、だからいじめられてたんだろが…それで結果がこのザマだよ。安岡…止まってるぞ。

日吉 ネジ巻いてやれや。

山田、ネジを巻くマネをしてやる。

安岡 チツ。チツ。チツ。

板東 ヤス。今何時だ？

安岡 十時二十五分。

日吉 ボチボチいこか。

立ち上がる囚人たち。

板東 俺たちは今夜こっから出ていく。時間がないんだ。

山田 ここからは俺たちだけでいくから。

日吉 あんたはとほここでバイバイや。

蒲郡 な、なんで…

板東 分かってるだろ。おまえには分かっているはずだ。

ゆっくりと去っていく囚人たち。

蒲郡 ちよつと待てよ！…どこいくんだよ！

叫ぶ蒲郡に日吉が振り返る。

日吉 …王様に会いに行くんや。ほなな！

囚人たち退場。

蒲郡

どこに行くっていうんだ、バカヤロウ…おまえらのいくところなんか、どこにもあるもんか…バカ野郎…どこにも…行くところなんてありやしないんだぞ…大バカ野郎…！

つづくまる蒲郡。  
舞台は暗くなる。

## ACT・03 精神科医1・蒲郡編

精神科医1登場。

精神科医1 ……それで？

蒲郡 それだけです。

精神科医1 他の人たちは…一緒に脱獄した仲間たちはどこへ行ってしまっただけでしょうね？

蒲郡 わかりません。

精神科医1 目が覚める前には必ず、あなたひとりが取り残されるんですね。

蒲郡 そうです。

精神科医1 いつも？

蒲郡 いつも。

精神科医1 なぜだと思いますか？

蒲郡 ……。

精神科医1 あなたはその理由を分かっているでしょう？

蒲郡 ……。(言い淀む)

精神科医1 正直に、思った通りに。

蒲郡 私は…彼らの…仲間ではないから…。

精神科医1 同じ刑務所にいるの？

蒲郡 そうじゃない、違うんだ…私は…

精神科医1 あなたは実際には法律を犯していない、取材のために体験入所している、志願囚に過ぎないから…そうですね？

蒲郡 私は…彼らが見たものが見たい。みんな、見たんだ。みんな同じものを見た。

精神科医1 (限りなく優しく、しかし目は爛々と輝いている) 同じものって？

蒲郡 ……。(沈黙に落ちていく)

精神科医1 (その様子を見て話題を換えるように)…どうしてそれが見たいの？

蒲郡 書くためです。決まってるでしょう。僕は書くためだけに生きてるんです。

精神科医1 どんな本を書くの？

蒲郡 犯罪者の深層心理です。そこには暗く淀んだ歴史の老廃物があるんです。血を流すことで歴史を築き上げてきた人類の共通の故郷がそこにあるんです。人間ともつとも親しい、もつとも古い友人がそこに住んでいるんです。僕はそれを書きたい。だからこうして刑務所の中で、犯罪者と共に過ごし、他の囚人と同じようにこうして精神分析も受け、彼らと同じように暮らしているんです。なんでもしますよ。僕はね、書くためなら、僕はなんでもするんです。

精神科医1 面白い本になりそうね。私も読みたいわ。タイトルは決まっているの？

蒲郡 ……それはね、決まってるんですがね、まだ、言えません。

精神科医1 そう、残念だね。…じゃあ、最後の検査です。

精神科医1は、手にしていたファイル状の冊子を開いて掲げる。

精神科医1 これがなにに見えますか？

蒲郡 ……雲。

精神科医1 (違うページを開いて)これは？



蒲郡 銃…そつ、猟銃に、見えます。  
精神科医1 これは？

蒲郡 …。鳥。

精神科医1 (違うページ)これ。

蒲郡 鳥…。黒い…

精神科医1 …(黙ってページをめくる)

蒲郡 鳥…(急に興奮して)鳥、鳥だよ鳥！ そんなインクのシミなんかクソくらえだ！

精神科医1 (静かに冊子を閉じる)…今日はこれまでにしましょう。戻って下さい。

蒲郡 先生。僕が志願囚だったこと他の囚人に言わないで下さいね。

精神科医1 もちろんよ。

蒲郡は安心したように独房のほうに戻りかけ、振り向く。

蒲郡 (囁くように)いるんですよ、先生！

精神科医1 …。

蒲郡 あいつはそこにいるんです。比喻や象徴なんかじゃない、今先生と私がこうして  
いるこの瞬間に、この同じ空間に、あいつはいるんです。

蒲郡、独房へ戻る。

所長登場。

所長 ご苦労様、先生。

精神科医1 …。(無言で会釈)

所長 どうかしら。

精神科医1 あまりいいとは言えません。

所長 また脱獄の夢ですか？

精神科医1 まあ…それだけならほとんどの在鑑者が同じような夢を見ますから…

所長 実行に移すようなことはないでしょうね。

精神科医1 その可能性はないと思いますが…

所長 が…？

精神科医1 明らかに精神分裂の兆候が出ていますね。自分が本当は何の犯罪も犯して  
おらず、本を書くための取材としてここに入所しているという、一種の現実逃避  
的な妄想です。

所長 自分のやったことを忘れているわけ？

精神科医1 ええ。少なくとも表面的には。

所長 五人も無差別に殺しておいて記憶にありませんとは、遺族は浮かばれないわ。実  
害はありますか？

精神科医1 今のところは、特に。

所長 もう少し、様子を見ましょう。

精神科医1 入院させないんですか。

所長 まだその必要はないでしょう。では…

精神科医1 絵島所長。

所長 为什么呢ようか。

精神科医1 所内になにか…鳥を…黒い鳥を連想させるようなものがないでしょうか。

所長 はあ？ 鳥…？どういことですか。

精神科医 1 いいえ、大したことではないんですが…

所長 特に思いあたらないようですが。それが大事なことなんですか？

精神科医 1 …わかりません。大したことじゃないかもしれませんが…。

所長 そう。…では私はこれで。

所長退場。

精神科医 1 …。

立ちつくす精神科医 1。

刑務所内は急激に夜になってゆく。

精神科医 1 退場。

## ACT・04 改革計画

刑務所に朝がくる。  
ジリジリリリ…とベルが鳴り響くなか、囚人たちは独房より起き出し、外に出て顔を洗う。

大久保老人がひとり、いつまでもモタモタと顔を洗っている。  
囚人たちは、一部独房に戻り、水内、権田原、大久保、松本、木川田が残り、流れ作業のようなことを始める。所内の労働である。老人は動作が遅く、足手まといになる。

リンリン…とベルが鳴り、休憩の時間となる。

権田原 なあ…。おかしいと思わねえか。

松本 なにがですか。

権田原 今日、土曜日だろ。

松本 ああ、そうだった。

権田原 てことは今日はハンドんだ。

松本 だから今日はこれで終わりでしょ？ なにがおかしいの。

権田原 なんて土曜がハンドンなんだよ。

松本 だって…そう決まってるでしょ。

権田原 おかしいよ。よく考えてみるよ。

松本 だって決まりでは、休業日は日曜、祝日、土曜の午後、官庁の休む土曜日って決まってるじゃないですか。

権田原 今は官公庁だって、土曜は毎週休むじゃないか。

松本 あ。そうか。

権田原 そうだろ。世の中の流れは週休二日に向かってるんだよ。それなのになんでおれたちだけいつまでも土曜はハンドンなんだろう。

松本 そういわれりゃ…

木川田 また始まったよ。ゴンさんも好きだねえ。

権田原 おかしいことはおかしいんだよ。おまえ何も感じないのかよ。

木川田 感心してますよ。まったくよくそう毎日毎日口くでもない文句のネタ考えつくもんだ。

権田原 口くでもなくねえだろ。おまえだって土曜休めりゃ嬉しいだろ。

木川田 別に。土曜が休みになったって、かわりにすることあるわけじゃなし…

権田原 いろいろあるだろ。本読むとか、一週間の出来事をノートに書くとか…

木川田 出来事？ できごとねえ。どんな出来事ですか？ 今日朝、起きました。顔を洗いました。昼にはタクアンふた切れと野菜のテンプラが出ました…ははは…全員書いてる内容が同じになっちゃうなあ。

権田原 (イライラして) だからそのテンプラの味とかを書けば、それぞれ個性がでるだろ！

木川田 味イ？ じいさん、今日のテンプラの味だってよ、どうだった？

大久保 あー、まあ、一言でいうと、んー…

木川田 松本さんはどうだった？

松本 まあ、不味かったですね。

木川田 教授はどうですか。

栗木田 ん。不味かった。

木川田 水内のおっさんは？  
水内 まずかったな。

大久保 …不味かった、かの。

木川田 なあんだ、みんな同じだあ。

権田原 味が同じなら、テンプラについての思い出だっていいんだよ。それなら人それぞれあるだろ！

大久保 しかしのう、あの野菜のテンプラは一日おきにでてくるからのう。そうそう都合よく毎回違う思い出があるかのう。

松本 すぐネタ切れになる可能性はありますねえ。

大久保 そうそうテンプラといえばあれは終戦直後のことじゃったか…  
水内 だれか止める。ものすごく長くなるから。

松本が大久保の口をぶさぐ。

木川田 テンプラと言えはさ、思い出したよ、オレさ、テンプラ使って一本撮ったことあんの。

松本 一本って、ビデオをか？

木川田 そう。まだ駆け出しの頃でさあ。確か、あれ十条のラブホテルだったよ。

松本 だっっておまえの撮ってたのはエロビデオだろ？ なんでテンプラが出てくんだよ。

木川田 要するにホラ、女体盛りってヤツよ。女の体に喰いもん盛りつけて、男が喰うの。

権田原 それのどこが面白いんだ…。

木川田 そりゃ最後はヤルんだよ、だけどホラ、ただヤルだけじゃ身も蓋もないからそーゆー趣向をこらすわけさ。ところが女の体につける喰いもんが足りなくてさ、オレ、一応カメラ回してたけど下っぱだったから、買いにやらされてさあ。その辺走り回ってたまたま買ってきたのがテンプラだったわけよ。テンプラ一万円分。結局もう全部テンプラ。…あれなんてタイトルだったかなあ…。確か、女体…

松本 あ…、それ、オレ見たことあるかも知れない…。

権田原 なるほど。まあ、そういうふうにいろいろな思い出があるわけだ。な？ だから土曜日は…

木川田 「女体盛りあわせ」…違うなあ…確か頭に女体がついたんだよ。

松本 あれ、俺の見たのなんてったかなあ。

水内 「女体コロモ揚げ」だ。俺は見たことがある。

一同、なにっ、という感じで水内を見る。

松本 意外と趣味があつなあ…。

木川田 「コロモ揚げ」…そうだったかなあ…なんか違う気がする。

松本 思い出した…！「女体グルメ・アブラのってます」！

木川田 それは絶対違うわ。

大久保 (やつと口が開放される)…「女体てんこ盛り・みんな揚げちゃう」…じゃ。

木川田 それだ！

松本 何で知ってんだジジイ！

水内 てめえ、ここに三十年いるんじゃないかったのか！

権田原 とんでもねえじじいだ！

大久保をフクロにする囚人たち。

栗木田 (皆を止めるように) 待て待て。…じいさん、その「みんなあげちゃう」というその「あげる」というのは…

大久保 …揚げ物のアゲじゃ…

栗木田 ん。(納得して引く)

水内 この野郎！

松本 寄りによってそんな考え落ち持ってきやがって！

権田原 おとなしそうな顔してとんでもねえじじいだ！

じじい沈む。

権田原 (肩で息をしながら) 何がみんなアゲちゃうだ…！ そんなことはどうでもいいんだよ！ そっじゃないんだ！ もっと真面目に考えろよ！

木川田 いいじゃないの。こうやって盛り上がってんだから。

権田原 だから俺のいいたいのは…。

賄い婦登場。

賄い婦 ご苦労さん。

松本 わ、びつくりした。

賄い婦 あんたたち、聞いたかい。

権田原 なんだ、オバさんか。

賄い婦 「なんだオバさんか」？ 「なんだ」はないだろ、「なんだ」は。

権田原 なんだで十分だ。

木川田 オバちゃん、また油売ってんの？ 今日の晩飯なに？

賄い婦 んー、野菜のテンブラだよ。

木川田 きかなきやよかった。

松本 なんて、昼夜同じなんだ。

賄い婦 なんだいなんだい無愛想だねえ。人がせっかくビッグニュースを持ってきてあげたっていうのにさあ。

水内 なんだい、ビッグニュースって。

賄い婦 そっそう、それだよ、あんたたち聞いたかい聞いたかい。

権田原 聞かないよ。

賄い婦 …。聞かないかい、そうかい。ふうん、聞かないのかい。ふうん…

賄い婦はスネてたち去る…とする。

権田原 ちよつと待て。…待てつてば。

賄い婦 おや、なーんだ権田原さんか。

権田原 なんだじゃない。…なんだよ。

賄い婦 「なんだじゃない、なんだよ」？…「なんだじゃない、なんだよ」…日本語はむつかしいねえ…。

権田原 根にもつババアだなあ…トボケるなよ。なにを聞いたって？  
賄い婦 聞きたいかい？

権田原 聞きたいです。

賄い婦 来るんだよ来るんだよ。

大久保 何がくるんかの。

賄い婦 ア、イ、ド、ル。

全員 はあー？

賄い婦 アイドルだよ。アイドルが来るんだよ。うれしい？ うれしいかい？

権田原 わけがわからん。

賄い婦 ほら、こんど文化祭があるだろ、年に一度の。その時に、なんとアイドルが一日所長になるんだよ。それでね、今日その挨拶にアイドルがくるんだってさ。

大久保 ほおー。

木川田 なんてアイドルだよ？

賄い婦 それがねそれがね（うれしそう）栗本、さ、や、かってえんだよ。

木川田 知らんなあ。

大久保 わしら世間から隔離されとるからのう。

権田原 おばさん何がうれしいんだ？ ファンなのか？

賄い婦 顔も知らないもん、ファンなわけないだろう。

松本 あんまり売れてないんじゃないですか。

賄い婦 それがさ、あたしと同じ名前なんだよオ。

一同 なに…イ。

賄い婦 なにイってなにかね。

権田原 だっておばさん松田っていうんじゃないかってっけ。

賄い婦 だからなんだい。松田沙也華っていうんだあたしや。

権田原 ……どうする。

松本 どうしようもないでしょ。

賄い婦 なんか文句あげだねえ、あんたたちは。ふん。

賄い婦退場。

権田原 けっ、一日所長だとよ。

松本 チャンスですよ。

木川田 なにが。

松本 一日所長だって、所長だろ。俺たちの生活改善要求を突きつけるんだよ。

木川田 バカか。そんなヤツに権限があるわけないだろ。

松本 少なくともそういう設定を認めさせるんだ。そして、要求を聞かないときは…

権田原 どうするっていうんだ。

一日所長、登場。

なぜか「無罪」と大書されたタスキをかけている。

小夜夏 あれー、出口がわからなくなっちゃったあ…。あ、皆さん今日は、今度一日所長でお世話になる栗本小夜夏でえす。

水内 あれが、アイドルか…？

大久保 なんじゃ、あの「無罪」というのは…。

権田原 なんかつげえ馬鹿にしてないか？

松本 所長。聞いて欲しいことがあるんですが。

小夜夏 え、なんですかあ。

松本 土曜日をね、休みにしてくれませんかね。

小夜夏 そんなこと言われても…こまっちゃったなあ。

松本 してくれないともっと困ったことになりますよ…。

小夜夏 えーと、じゃあ、そのかわり、新曲を唄います。…ぐふつ。

松本、いきなり小夜夏に当て身をくらわせる。

権田原 おい！

松本 ドア締める、ドア！

松本の気迫に押されてドアをしめる。

小夜夏 やめて、ちょっとお。

松本 あんたは人質だ。

水内 無茶苦茶するなあ。

権田原 「冗談じゃねえ、おれはおりぞ。

鳴り響くサイレンの音に、一同は青ざめた顔を見合わせる。

権田原 どうすんだよ！

大久保 こりゃあ同じ穴の貉じゃのお…。

松本 こいつを人質にして、ヤツらに要求を突きつける。革命だよ革命。

権田原 バカなこといなよ！

松本 おれはなあ、テロリストなんだよ。ここに入ったのも、電気会社の支局を爆破したからだ。電気会社のやつらは企業の利益のために原発をたてまくってる。だから制裁を下した。今度はここだ。刑務所を理想国家にするんだ。

権田原 …正気か、おまえ！

松本 俺は機会を狙ってたんだ。

権田原 そんなデタラメな計画に俺たちを巻き添えにする気か？

木川田 おい、オマエ、クミコじゃねえか。ええ？

小夜夏 えっ！

木川田 俺だよ、木川田。覚えてないか？

小夜夏 あんたなんか知らないわよ。

木川田 あ、やっぱりそうだ。オマエ、五年前にビデオとったろ？ その時カメラやつ

てたの、俺だよ、ほら、十条のラブホテルで。

小夜夏 (ギクリ) なに言ってるのよ、あんた頭おかしいんじゃないの？

大久保 ほう、するとこれがあの…

栗木田 女体竜田揚げの…

水内 違う、女体舟盛りの…

小夜夏 違っつてば、てんこ盛り！

一同 …。

小夜夏 あっ。

大久保 語るに落ちたのう。

威嚇射撃の音がする。

数人が外の様子を見る。

水内 どうだよ、表の様子は。

大久保 すっかり包囲されとるようだよ。

権田原 あああああ、なんでこんなことになっちまったんだろうなあ。

松本 とにかく、いけるとこまでいこうぜ。こうなったらぞ。

権田原 俺はただ刑務所をもつほんの少しだけ快適にしたいだけなんだよ！

松本 とりあえず人質がいるからよ。とにかく武器だよ。看守の持つ銃とかを取り上げるんだ。それで次に看守どもを檻んなかに入れちまおう。

大久保 そんなで、ここから脱獄するんかの。

権田原 別に俺は出たいなんて言っただけだよ！ ただ、ただ、風呂の時間をあと五分だけ長くしてもらったり、絵がきき色つきでも可、とか、そういう風に少しづつ、少しづつ変えていきたかっただけなんだよ…！

松本 俺もここから出ようなんて思っっちゃいないさ。だってどこに行こうと俺たちは囚人なんだからさ。俺たちのいるここはどくだって鑑獄なんだよ。

権田原 だったらなんて…！

松本 だからさ、ここを俺たちの居場所にするんだよ。俺たちが自主的にここを管理するんだ。俺たちは囚人だ。だからここに囚人だけの国を作るんだよ。

権田原 きりきりじんかオマエは！

松本 そうだよ！ おれはきりきりじんなんだよ！…きりきりじんてなんだよ？

権田原 知るか！ とにかく俺は、俺はなあ…

銃声が響き、権田原は額を撃ち抜かれて倒れる。

栗木田が駆け寄って権田原を診る。

木川田 ゴンさん！

水内 どうだ？

栗木田 (権田原を診て)…ウム。額を撃ち抜かれておる。首をすげかえりゃ、助かるかも知れん。

木川田 アホかあんたは！

栗木田 なあに、わしゃ中国で二回ほどやったことがある。(外に向かって)おおい、分かった。降参じゃ。すまんがしゅじゅちゅの用意をしてくれんか。あとすげかえ用の首を…

銃声。栗木田倒れる。

木川田 (外に)降参って言うてるだろ！ てめえらそれでも人間か！

水内 ばか、伏せろ！

連発する銃声。木川田、水内、倒れる。

松本 上等じゃねえか…

松本、小夜夏を引ったてて窓の正面に立つ。

松本 やい、権力の手先ども、撃てるもんなら撃ってみろ！

小夜夏 撃たないでくださあい。あたしは関係ありません。



松本 はっはっは。おまえらに一日所長が撃てるか。撃てねえだろ。臆病ものの腐れ役人が！ ざまあみやがれ！

銃声は沈黙している。

松本 … 唄え。

小夜夏 え？

松本 ここで新曲をうたえ。やつらに聞かせてやれ。

小夜夏 でもオ。

松本 いいから唄え！

小夜夏 … く、栗本小夜夏、新曲を唄いまあす…

銃声。小夜夏倒れる。

小夜夏の体を貫いた銃弾が松本の体にくい込む。

松本 … やりやがったな…。

よろめく松本。

松本 きりきりじんって…なんだーッ！

銃声。松本倒れる。

沈黙。

大久保 (伏せていた顔を上げ、あたりを見回す)…死体でんこ盛りになってしもった…。

暗転。

## ACT・05 精神科医2・権田原＋松本編

権田原と松本が、並んで体操している。  
精神科医2、後方で大学ノートのようなものをめくって読んでいる。

精神科医2 (ノートのようなものから目を上げて) それで…?

権田原 それだけですよ。

精神科医2 この後、最後はどうなるの?

松本 別に…。最初から最後までありませんよ。もともと僕らのバカはなしから出来た話なんだから。

精神科医2 面白い話ね。

松本 そうですか。でも許可されなかった。

精神科医2 そりゃそうでしょう。もともと許可されるとも思っていないでしょう?

松本 まあね。

精神科医2 で、どうするの? 別のだし物を考える?

松本 さあ…。

精神科医2 これだけのものを考え出せるんだから、まだ、フェスティバルには間があるし、今からでも違うお芝居を考えたらどうかしら?

松本 カチカチ山でもやれっていうんですか。

精神科医2 機嫌が悪いのね、松本さん。

権田原 先生。

精神科医2 なに?

権田原 胸のボタンがとれかかっていますよ。

精神科医2 は反応しない。黙って権田原を見ている。

権田原 信用しないんですか。囚人の言うことなんか信用できませんか。

精神科医2 はやはり動かない。胸元を見ようとせず、権田原を見ている。

権田原 …嘘ですよ。ボタンなんかとれてません。

松本 先生、ボタンがとれた時、どうします?

精神科医2 新しいのをつけるわ。

権田原 そうですよ。誰だってそうです。でもね、先生、僕らは違う。

精神科医2 …。

松本 この囚人服、前はボタンがあったんですよ。知っていました?

精神科医2 いいえ。

権田原 中国人が来たんですよ。前にね。何だか気味の悪い奴でねえ。三人殺したとかいう話だったなあ。

松本 その中国人、えらく看守と折り合いが悪くてね。事あるごとに反抗してたんです。看守も意地になってイビってたんだけど、ある時一番いびがみあってた看守がね、ちよっとしたことその男を懲罰房に入れようとした。まあ、よくあるいいがかりでね。中国人はものもいわずにいきなり自分の服のボタンを引きちぎってね、こう、指に握りこんで、…ビシッ…!

権田原 その看守、左目を失明しちゃったんですよ。「指弾」ていうんだそうです。すごい技ですよ。十円玉ひとつあればね、親指でパチン！…一人殺せる。百発百中だそうですよ。…何の話でしたっけ？

精神科医2 ボタンがとれたとき、囚人はどうするか、でしょう。

権田原 あそうそう。まあ、そんな事件があったもんだから今はボタンなしですけどね、前はあった。で、これがよくとれるんですよ。そうするとね、まず「紛失届」を書かされるんです。分かります？ ボタン一個とれて「紛失届」ですよ。笑っちゃうでしょ。そんなの面倒ですよ。でも届けを書かずにほっといて看守に見つかるとね、今度は即、懲罰ですよ。まあ今はボタンなしですからねえ。下らないう規則がひとつ減ったわけだ。

精神科医2 で、あなたは何が言いたいのかしら。

権田原 別にいいことなんかありませんよ。しいて言えば、中国人おそるべし…ってとこかな。

権田原と松本はダツシユの練習を始める。

精神科医2 これはどうするの？ お芝居は中止？

松本 どうでもいいじゃないですか。もともと先生のアイデアなんですよ？ そういうの聞いたことがありますよ。精神科の医者がね、患者に芝居させてね、その様子を観察して精神状態を分析するっていう…

精神科医2 確かにそういう療法はあるけど…でもこれはあなたがたが持つてる「所内生活の心得」にも書かれていることなのよ。

権田原 知ってますよ。

松本 僕らあれのこと「生徒手帳」って言ってんですけどね。その生徒手帳の第四章…

権田原 「第四章、教育行事。一、教育行事（クラブ活動およびリクリエーションなど）は、とかく単調になりがちな所内生活にうるおいを持たせ、心を爽快にして気分転換をはかり、生活に明るいうリズムをつくるとともに、心身の健康の増進をはかるために行うものですから、積極的に参加し、生活目標を実現するように努めてください。」「よく覚えてるでしょ。」「二、年間の教育行事として宗教・情操・道徳・文化・職業・時事・産業・経済などについての講話会・音楽会・映画会・演芸会…」「ここですね、ポイントは。「演芸会などを行います。またこの他希望者だけが参加する彼岸会・盆供養・命日会・各派別宗教の集まりなどがあります。」「以下略。

松本 その演芸会ってどこに引っ掛けて、囚人に芝居作らせようなんて、先生もなかなかやりますね。あの所長がよく許可したもんだ。

権田原 どうですか、僕らの書いた芝居は？ カウンセリングの参考になりました？

精神科医2 ええ、とても。

権田原 そりゃよかった。

精神科医2 特に、女の子を人質にとるところがね。あそこは誰が考えたの。

松本 僕ですよ。

精神科医2 松本さんはテロリストの役なのね。

松本 そう。地でできますから。

精神科医2 地でね。でもあなたがこっして刑務所にいるのは、電力会社を爆破したからじゃないでしょう？

松本 先生、何言ってるんですか。

精神科医2 確かにあなたの仕掛けた爆弾で、電気会社に勤めてる小倉さんっていう営業部長が一人死んだ。でもあなたが逮捕されたのは別件だったはず…

松本 (動きがとまる) 何言ってるんだ！ でたらめはやめてくれ！

精神科医2 あなたは忘れてるのよ。それを思い出させるのも私達の役目のひとつなの。

松本 …。

精神科医2 あなたは爆破事件の後で、偶然知り会った一人暮らしの女性の所に潜伏していた…その女性の名は小山則子…

権田原 もついででしょうか？ 今日はいくらから面会があるんですよ。面会は週に一度だけですからね。

精神科医2 そうね。今日は終わりにしましょうか。

精神科医2 は踵を返して、ふと振り返る。

精神科医2 そうそう松本さん、あなたにも面会の方が見えてるの。

松本 (相手にしない) まさか。先生が冗談言つの初めて聞きましたよ。

精神科医2 …。

松本 (精神科医を見る) 俺に？

精神科医2 初めてね。あなたがここに来て。

松本 そんな馬鹿な。

精神科医2 女の方よ。若い…。家族の方…ではないよね。

権田原 余計なお世話でしょう。誰が面会のこととあなたには関係ない…

松本 … 則子か。そうでしょ先生。

精神科医2 …。

松本 あんたが呼んだんだな…。

松本は歯をくいしばって精神科医2を睨み、精神科医2は患者を観察する医者の目で松本を見返す。

ジリリリ…とお馴染みのベルが鳴る。

精神科医2 それじゃ。お疲れさま。

精神科医2は松本に視線を投げかけて退場する。

独房エリアに居た囚人たち(日吉、木川田、平山、安岡)が出てくる。

権田原はそのまま残り、メイン舞台には権田原と松本を含めた六人がいる。リンリン、と短いベルが鳴る。

同時に独房エリアに小山則子が登場する

松本 …。

権田原 松本、オマエだぞ。

日吉 はよいけやあ。後がつかえとるやないけ。

松本 …。(独房エリアへ入る)

独房エリアを残してメインは少し暗くなる。面会待ちの囚人たちは座して待つ。

## ACT・06 面会

面会所。  
格子越しに会話する松本と則子。

則子 (松本を見つけた、というアクションで) あっ。

松本 ……久しぶりだな。

則子 松本さん。久しぶり。

松本 何しに来た？

則子 あ、やっぱりそう言われちゃった。そう言われるなあって思ってたんだ。

松本 まだあそこに住んでるのか？

則子 そうだよ。松本さんの荷物は警察が持っていったけど。

松本 だらうな。

則子 お土産もってきたの。

松本 差し入れてっていうんだよ。

則子 あ。差し入れ、ですよ。ごめんなさい。あたし、慣れてないから。

松本 そうだらうよ。

則子 慣れてたらおかしいか。

松本 なに持ってきたんだ？

則子 なにつて？

松本 差し入れは何持ってきたんだ。

則子 ハンバーガー。

松本 なに？

則子 ハンバーガー。駄目かな？

松本 駄目じゃない。

則子 松本さんは毎日何してるの？

松本 別に。毎日、起きて、働いて、食べて、寝るだけだよ。

則子 あら。

松本 なんだ。

則子 私と同じ。

松本 そうかい。

リンリン、と次のベルが鳴り、囚人の一人が独房エリアに入ってきて来る。  
以降、ベルがなるたびに囚人が一人ずつ入り、独房エリアは騒がしくなってゆく。  
松本と則子が独房エリアから出る。  
独房エリアは不意に無音になり、面会をする囚人たちの姿だけが見えている。

松本 (くるしそう) 俺は知らなかったんだよ。おまえが、あのとき死んだ小倉って男の愛人だったなんて…

則子 あいじんって言葉好きじゃないな。

松本 かつこつけんじゃねえ！ おまえだって…それ知ってたろ…！ あのアパートで暮らしてたときに…それを知ってて、平気な顔で暮らしてたじゃねえか…！

則子 あ、やっぱり忘れてるんだ。

松本 俺はあやまらねえぞ。俺は正しいことをしたんだ。電力会社のやつらは絶対に…

則子 ……松本さん。思い出して。

松本  
うるさい！

則子  
でも松本さん、思い出して。あなたが私を殺したの。だからあなたはここにいるの。思い出して。私のこと忘れないで。お願いしますね。

リリリリ…とベルが鳴り、後ろの囚人たちは面会相手に別れを告げ手を振っている。松本は膝から崩れ落ちる。

則子は挨拶をして退場してゆく。

ベルの音だけが鳴っている。

囚人たちはそのまま自分の場所に座り込む。

## ACT・07 精神科医3・セブン編

山田、メイン舞台に登場。  
うずくまる松本に話しかける。

山田 あ。死んでますね。

松本 …。

山田 おーい。だいじょぶかー。

松本 ううう。

山田 あー。だめだこりゃ。

精神科医2、登場。

精神科医2 大丈夫。精神的には正常に戻ったんですから。

山田 あ、どうも。ご苦労様です。

精神科医3、登場。

精神科医3 すこし荒療治過ぎやしませんか？

精神科医2 必要な治療を荒療治とは言いません。もっと言葉を選びなさい。

精神科医3 申し訳ありません。

精神科医2 お待たせしましたね。カウンセリングを始めましょう。

山田 いやあ、僕は正常ですよ。僕くらいじゃないかなあ。あんまり深くものを考えてないから…。

精神科医2 私もそう思いますよ。でも、カウンセリングというのは何も異常を発見するただけに行くわけではないんです。

山田 あ、そうですかあ。なるほど。

精神科医2 私たちは別の意味であなただけを危険視しているんです。

山田 危険って…僕がですか。

精神科医2 ええ。あなたのこれまでの記録によると確かにあなたは正常過ぎるほど正常です。刑務所と言う異常な環境でこれほど正常を保てるのは私にいわせれば異常です。

山田 そんな無茶な。

精神科医2 もうひとつの可能性は、ここから出ていくことが出来るという確信です。

山田 僕は十五年ですよ。まだ半分以上も残ってる。

精神科医3 山田宗介、通称セブン。前科三十九犯。強盗、殺人、詐欺、死体遺棄、麻薬取り締まり法違反、強姦、エトセトラ。しめて実刑十五年の判決。その華々しい経歴により、犯罪王セブンと呼ばれる…。

精神科医2 そのあなたが逮捕されたのが七年前。刑が確定したのが五年前。

精神科医4（小山則子）登場。

精神科医4 その裁判に、ひとつの謎があります。それは女です。一人の女の存在が事件の裏に見え隠れしている。けれどあなたはその件に関しては完全に黙り通した…。弁護側はその女性についての追及を断つために、求刑通りの判決を受け入れたようにも見えます。

山田 …。(知らん顔をしている)

精神科医 2 私たちは警察でも、刑務所の職員でもありません。私たちは医者です。患者について分からないことをほうっておくことはできないんです。

山田 …。(相変わらず知らん顔)

精神科医 2 あなたはここを出ていくつもりですか？

山田 …。

精神科医 2 …どうやら何もしゃべって貰えそつもありませぬ。結構です。では最後に…(手にした冊子を開く)これが何に見えますか…？

山田 …(しばらく黙っているが)…鳥…かな。

精神科医 2 …。

精神科医たち、めくばせしあって

精神科医 2 今日はこれで終わります。ご苦労様。

精神科医たち、退場。

山田は一人残る。  
暗転。



## ACT・08 集団療法

精神科医2、精神科医3、精神科医4が高いところに陣どっている。  
囚人たち全員、中庭に集合して正座している。

精神科医2 皆さん、聞いてください。今日は、特別に所長の許可を得てこうして皆さんに集まっていたできました。ご承知の通り、私達は常日頃、皆さんの精神の健康のためのカウンセリングを行っています。それは通常、個人、あるいは少数のグループの単位で実践されているわけですが、今日は新しい試みとして、このような大所帯で、いわゆる集団カウンセリングというものを試してみたいと思います。

囚人たちは神妙に聞いている。

精神科医2 それではこの集団カウンセリングの目的を。

精神科医3 この集団カウンセリングの目的は、皆さんの現在の精神状態を分析し、今後のよりよい所内生活の指針とするための参考とするための手助けとするための一助として活用するための前衛的で革新的で実験的で薄利多売的な…(混乱しきっている)

精神科医2 もう結構。では集団カウンセリングの具体的方法論を。

精神科医4 (インテリ風) 一人囚人の皆さんには、これからわれわれが指示する状況に、実際に自分が置かれたら、自分たちがどういう行動をとるか、ということをしミュレーションしていただきます。その反応によって、皆さんの心理的現在、いわば精神面での立ち位置、ともいっうんでしょうか、メンタルなファクターを理解する資料にしたいと考えます。

精神科医2 ではさっそくはじめさせていただきます。どうか皆さん、緊張せずに、肩の力を抜いて、自分の心の声に素直になって下さい…。

精神科医3 恐れることはありません。

精神科医4 内なる声の赴くままに…。

精神科医2 オープン・ユア・マインド…。

囚人たちは目を閉じて、一種の催眠状態に入っていく。

精神科医3 なお、これは純然たる医療行為であり特定の宗教とは関係ありません。

精神科医2 余計なことは言わなくてよろしい。

精神科医3 失礼いたしました。

精神科医2 あなたがたはいま、海辺にいます…。

囚人たちは立ち上がって、海の匂いを嗅ぐ。

精神科医2 海は風ぎ、空は晴れています。いい気持ちです…。海からの風が汗ばんだ体を心地よくなぶる…。

囚人たちは気持ちよさそつに深呼吸する。

精神科医4 足元には濡れた、熱い砂…。

精神科医2 そして色とりどりの貝…。

精神科医 3 あ、目で足を切ってしまった。

囚人たちは足を押さえて痛がる。

精神科医 3 真っ赤な血がドクドク流れ出して、あたり一面は、もう血の海…あ痛っ

(精神科医 2 がはたく)。

精神科医 2 …。

囚人たちは血の海でもがき苦しんでいる。

精神科医 3 …。入ってますネ。

精神科医 2 …。(どっすんのよ、という視線)

精神科医 4 しかし、傷は浅かった…!

精神科医 2 …。(エライ! という視線)

囚人たち、立ち直る。

精神科医 4 血の海も引き、今は、夏。(強引な展開)

精神科医 2 爽やかな風、輝く太陽。

精神科医 4 治った足。

精神科医 2 さあ、あなたがたは海の男。海の男が海でどっする。

囚人たちは地引き網を引く。

精神科医 4 気持ちをひとつにして地引き網を引く。壮快です。

囚人たちは網を引き続ける。

精神科医 2 (突然) あ、突然大きな波が。

囚人たちは驚き慌てる。

精神科医 2 大丈夫、冷静に対処しましょう。波に身を任せるのです。

囚人たちは波に合わせてウェーブをする。

精神科医 2 波は引いていきました。皆無事です。海はあなたがたの味方なのです。

精神科医 4 そして今は、夏。

囚人たち、額の汗を拭う。再び網を引く。

精神科医 2 …。大漁です。いろいろな魚がいますね。鰯。鯖。ぶり…(安い魚ばかり)

精神科医 4 鯛。はまち。鮪…。(高い魚ばかり)

精神科医 2 (対抗意識を燃やす) さより。こはだ。…ししゃも…

精神科医 4 伊勢エビ、ウニ、大トロ…

精神科医 2 タコ、えー、イカ…

精神科医 4 金目鯛。鰹。イクラ。

精神科医 2 た、たまご…

いつの間にか囚人たちは寿司を握っている。

精神科医 3 あ、波。

囚人たちは寿司をほつり出してウェーブで対処する。

精神科医 2 …海はすべてを洗い流して行きます。執着も過去も、そして貧富の差も。  
精神科医 4 そして今は、夏。

囚人たち、額の汗を拭う。再び網を引き続ける。

精神科医 2 あ…。あれは！…鮫だ！

囚人たちは驚き恐れる。

精神科医 2 季節はずれの鮫の襲来に逃げる暇もなく一人が足を噛まれてしまいました。

山田、足を噛まれ、苦しむ。

山田 うおおお、いてえ…いてえよー！

精神科医 3 あたりは血の海！…です（精神科医 2 の顔色を窺う）…か？

精神科医 2 （おうように頷き）あたりは血の海です。

精神科医 4 冷静に対処して下さい。

精神科医 2 仲間が苦しんでいます。どうしますか。

栗木田 （皆に）しゅじゅちゅするのじゃ。

精神科医 2 （すかさず）ここは大学病院の集中治療室です。

栗木田を先頭に山田を取りかこんで並ぶ。

精神科医 4 あなたがたは世界各国より招かれた、いずれ劣らぬえりすぐりの外科医ばかり…

精神科医 2 精鋭チームが丸となって不可能に挑戦します。

全員が手袋をはめ、うなづきあう。

栗木田 メス…！

「メス」「メス」「メス…」とリレーで渡していく。

それは途中で「キス」に変わり、帰って来る頃にはキスの握り寿司になっている。  
栗木田はたっぷり醤油をまぶしてそれを喰う。

栗木田 カンシ…！

「カンシ」は「カンブリ」に変わる。

栗木田は喰う。

精神科医 2 患者の呼吸が乱れてきました。

栗木田 人工呼吸！

一同、口移しによって空気を輸送する。  
栗木田、山田を抱擁して人工呼吸をほどこす。

山田 …ぶはっ。がはごほげほ！

精神科医 2 とうやら持ち直したようです。

精神科医 3 そして大きな波が！

囚人たちウェーブ。

精神科医2 波はすべてを洗い流してくれませう。  
精神科医4 そして今は、夏。

囚人たち、額の汗を拭う。そして地引き綱を…

精神科医2 ここは山です。高いたかい山の頂上がもうすぐそこまで迫っています。

囚人たちは慌てて山に登り始める。

精神科医2 頂上です。

囚人たち、頂上を極める。

精神科医4 何が見えますか？

囚人たち、空の一点を見る。

精神科医4 なにか見つけましたね…。

精神科医2 さあ、それはなんですか？ もっとよく見ましょう。

精神科医4 もっとよく。

精神科医2 よく見るんです。

精神科医4 よく見るんです。もっと。

精神科医2 よく、見るんです。

水内 やめろ…。

精神科医たち …。

水内 やめろッ！

水内以外の囚人たちの動きがすべて止まる。

水内 …。

水内、立ち尽くしている。

ザザッと、風が吹いて、木立ちがゆれ、葉がさわぐ。  
あの娘が、見ている。

水内 …。

かすかに、非常にかすかに、女の笑い声が聞こえる。

水内 誰だ。

それに答えるかのように、あるいはまたことさら無視するかのように、風の音が女の笑い声か、判別つかないその音が響く。

水内 …！ でてこい…！

意味をなさない叫び声を上げて、水内は暴れる。

その水内を、精神科医たちはじつと凝視している。

精神科医2 … 本日のカウンセリングをすべて終了します。

ジリリリ…とベルが鳴る。

囚人たちはのろのろと独房エリアに戻ってゆく。

水内は一人残っている。

精神科医たちは水内を見ている。

ACT・09 精神科医4・水内編

囚人たちは独房エリアへ去り、水内と精神科医たちが残る。

精神科医4 それで…？

水内 それだけです。

精神科医2 何が見えたの？

水内 …。

精神科医4 水内さん。

水内 若い女がいて…俺を見ている…。見たことのある女の子だ。俺は、ずっと、長い間見ていた。あの女の子を…

精神科医2 思い出して。

精神科医3 思い出して。

精神科医4 思い出して。

水内 あの女の子を、俺は殺したんだ。首を締めて…殺した。

精神科医4 そうよ。あなたはその子を殺した。

精神科医3 その時。

精神科医2 その時に。あなたは見た。

精神科医4 正直に、感じたままを…。

水内 …鳥だよ。黒い鳥だ。

精神科医2 その正体を私達は知りたい。

精神科医4 皆同じものを見た。

精神科医2 同じものを。

精神科医たち、散開して退場してゆく。

ひとり残る水内は、暗闇で獣のように目を光らせている。

水内 あの女は…誰だ…あれは、俺は知っている…確かに知っている…誰だ…出てこい…

暗転。

ACT・10 所長の部屋

暗転明け。精神科医5がいる。  
そこへBBが登場する。

BB ああ疲れた。ちょっと休ませてくれ。

精神科医5 びっくりしたあ…なに？ どちら入ったの？ あんたお客？

BB ああ、いいんだいいんだ。とにかく少しこのまま休ませてくれ。

精神科医5 だめよ、お客さんじゃなきゃ。

BB ああ？ 何の客だつて？

精神科医5 何つてなによ、変な人ねえ。ヘルスよ、決まってるでしょ？

BB ああそう。ヘルスってなに？ 健康？

精神科医5 なにそれ？

BB おまえなんでそんなかつこしてんだ？

精神科医5 これが制服なんだもん。せいしんぶんせいきい、のかつこつだつて、店長は言っていたよ。

BB はあん。

精神科医5 でね、お客さんはそついつ患者になって、それで、エスエムなんかするの。

BB ああ、そつかあ、もう世紀末だもんなあ。

精神科医5 フフ。

精神科医5はわけも分からず納得して笑っている。

精神科医5 ねえ、名前なんて言つての。

BB 俺か、俺はな…

精神科医5 …。

BB 耳かせ。

精神科医5、素直に顔を寄せる。

BB …。

精神科医5 ウキヤー！

BB なんだよ。

精神科医5 くすぐつたい！

BB …。

精神科医5 …はあはあ…ああ、くすぐつたかった。死ぬかと思った。

BB まだなんにも言つてないだろうが。

精神科医5 だつてあんた、息荒いんだもん。ねえ、興奮してんの？

BB 別にしない。

精神科医5 嘘。してるんだ。

BB なんだかなあ…。

精神科医5 ねえ、名前教えてつてば。

BB だから耳かせて。

精神科医5 …。

精神科医5はクスクス笑いながら、今度は用心しながら耳を近づける。  
BBはその耳に口を寄せる。

精神科医5 …うう。(くすぶったさに耐えている)

BB …。(言いかける)

精神科医5 うは。はっ。ほほー。

BB オマエ聞く気あんのか？

精神科医5 ごめん、ちゃんと聞くから。

BBは精神科医5の耳元で囁く。

BB ブラックバード。

精神科医5 …。

BB (口を離して)わかったか。

精神科医5 なにそれ。

BB 俺の名前だ。

精神科医5 …。

BB なんか文句でもあるのか。

精神科医5 地獄に堕ちろー！

BB それはブラックエンジェルだろオマエは。

精神科医5 …。

精神科医5、暴走族の真似をする。

BB …？

精神科医5、どうやら「ブラックエンペラー」といいたいようだが、似てもにつかない。

BB …なにそれ。

精神科医5 (真似)

BB …。暴走族？

精神科医5 (そうそう)

BB ブラックエンペラー？

精神科医5 (そうそうそう)

BB 年がばれるぞ。

精神科医5 お互いにね。

BB ブラックバードだよ。

精神科医5 変な名前。

BB よけいなお世話だ。

精神科医5 でもかつこいいよ。ちよつと。

BB オマエ、ちつとも緊張してないな。

精神科医5 なんで？ なんで緊張すんの？

BB なんでつてオマエ、こんな経験はなあ、滅多にできないんだぞ。

精神科医5 どうして？ どうしてできないの？

BB 俺は滅多に人前には出てこないからだ。

精神科医5 なんで？

B B 少しは自分で考えろよ。  
精神科医 5 …。

精神科医 5、考えている。

B B 考えてるのか？

精神科医 5 うん。

B B なにを？

精神科医 5 …。わかんない。

B B どうして俺が滅多に人前に出てこないか、だろ。

精神科医 5 あ、そうか。

B B そんなことオマエが考えて分かることか？

精神科医 5 わかんない。

B B じゃあ考えるな。考えてもわからんことは考えなくていい。

精神科医 5 うん。わかった。

B B 素直だな。

精神科医 5 ねえ、もう三十分たったよ。ほんとにしらないの？

B B したいのか？

精神科医 5 ええ？ いやあたしがしたいとかしたくないとかじゃなくて…そりゃあた

しは仕事だからね、したくないたってしなきゃおまんこの喰い倒れなわけじゃないの。

B B おまんまの喰いあげ、だ。

精神科医 5 ちよつと待って、途中で話がそれるとなに話してたかわかんなくなっちゃ

うんだから。

B B そりゃ失礼。

精神科医 5 そりゃさ、したい時だつてあるわよ。あるけどさ、したい時にしたいって

おもっちゃうと、したくないときにしたくないっておもっちゃうので、それは「まっちゃん」でしょ？

B B なにいつてんだ？

精神科医 5 なにいわせんの？

B B まあ、よくわかんないけど、仕事するのは何事も大変だよなあ。

精神科医 5 あんたは仕事なんなの？

B B 俺か？ 俺はまあ、存在自体が仕事かな。

精神科医 5 へえー。

B B おまえ分かってないだろ。

精神科医 5 うん。

B B さて、そろそろいくか…。

精神科医 5 いっちゃんのこと？

B B うん。今夜はな、フェスティバルなんだ。

B Bは退場していく。

精神科医 5も退場。

夜になってゆく。



## ACT・11 フェスティバル

夜。

音楽が流れ出す。  
期待に息を呑み何かを言葉もなく待っている。  
踊り子登場。  
囚人たちは独房から這い出してダンサーに群がる。  
踊り子は囚人達を挑発するように踊る。

踊り子とセブンの目があつ。

山田  
…！

叫びかける口を踊り子の手がふさぐ。  
踊り子は踊りつつセブンに目くばせをする。  
その瞬間が近づいていることを踊り子だけが知っている。  
チラリ、と踊り子が壁の時計に目を走らせた刹那、  
ドーン！ と巨大なブレイカーが落ちる音とともに、音楽と明かりが消失する。  
なにかのモーターが電源の供給を断たれて回転を落としてゆく音が、飛行機の急降  
下の音のように暗闇に響く。  
囚人達の騒ぐ声が暗闇から聞こえ、それも遠くなつてゆく。

## ACT・12 脱走

暗転明け。

美津枝の部屋。

大きな袋をやつとの思いで引つ張ってくる美津枝。  
その場にへたり込む美津枝。

美津枝 やった…とうとう…やったわ。

袋から水内がモゾモゾと這い出す。

美津枝、後ろから水内に飛びついて抱きつく。

美津枝 宗介！

水内 …。

美津枝、水内に抱きついたまま、ピョンピョンとはねる。

美津枝 とうとうやったのよ。ねえ！ すいでしょアタシ！ アタシが宗介を脱獄させたんだよ！ ねえねえ！ アタシ偉いでしょ？ ずっと考えたんだア…どうやったら宗介を連れ出せるかって…。びっくりした？ こんなにうまく行くなんて思わなかったでしょ？ あたしも！ でもうまく行ってよかった！ アタシ天才かなア天才かも知れない。スゴイでしょ？ ねエ宗介。もう8年だよ。アタシもう二十五だよ、信じられる？ 宗介と一緒に舞台立った時はあア、アタシまだ未成年でさ、宗介のことセブン兄さん、なんて呼んでたんだもんね。ねエ、あたしの踊り見たでしょ？ あたしね、きいてよ宗介。あたしさ、クッククック、ダンサーになったの。おどろいたア？

美津枝、ようやく水内の顔を見る。

美津枝 …アンタ、誰。

水内 …。

美津枝、とびはなれて、用心深く水内をながめる。

美津枝 誰なのよ！

水内 人違いしたんじゃないのか。

美津枝 どういうことよオ！

水内 オレはその、宗介とか言う奴じゃないぜ。

美津枝 分かってるわよ。見れば分かるわよ。だからアンタ誰よ。何でこんなところにいるのよ。

水内 そりゃあこつちのセリフじゃないかな。まあ、オレが誰でもたいした問題じゃないだろ。問題はあんたが脱獄させる相手を間違えたってことだよ。

美津枝 ウソ…。

水内 ウソではない。

美津枝 「冗談でしょ。

水内 冗談なんか言う気にはなれないな。

美津枝 どっかに隠れてんでしょ。どこよ、宗介は？ あんた、宗介の仲間なんでしょ？ 宗介はどこ？

水内 刑務所の中だな。

美津枝 そんなのイヤア！

水内 …。

美津枝 なんでよオ、こんなことってあるの？ アンタなんの恨みがあっててこんなヒ

ドイことすんのよ。

水内 …。

美津枝 ヒドイよ。こんなのヒドすぎるよ。バカバカバカ。

美津枝、ジタバタ暴れる。

水内 …。

美津枝 なに黙って見てんのよ。少しは責任感じなさいよ。

水内 オレに何の責任があるんだ。

美津枝 何よ、落ち着き払っちゃって！

水内 …。

美津枝 どうせアタシはバカよ！ 何カ月も考えて、慎重に慎重に準備してさ、やっとの思いで成功したと思ったのに…肝心なところでドシ踏んで、さぞおかしいでしょうよ。

水内 …。

美津枝 おかしいんでしょ、笑いなさいよ！

美津枝 …。

美津枝 笑え！

水内 …。

水内、口の端を上にはひん曲げる。

美津枝 何よ、そのひきつった笑いは！

水内 別に笑いたい気持ちがないんだ。

美津枝 じゃア、いいわよ。でもね、アンタ、アタシのおかげで出られたんだからね。

人違いでも、あんたのこと出してやったんだから。感謝されこそすれ、バカになれるスジ合いはないんだからね。

水内 別にバカにしたい気持ちにもならないようだ。

美津枝 じれったいわね、アンタ。うれしいでしょ、自由になれて。うれしいって言い

なさいよ。そうでなきゃアタシのしたこと、丸つきり無意味じゃない。そこでしょ？

水内 そう言われても…

美津枝 うれしいでしょ！ 出られて！

水内 …。

美津枝 どうなのよ！

水内 特に、うれしくはない。

美津枝 強情ねえ…。何でうれしくないのよ。自由になれたのよ。

水内 …。

美津枝 あんた、ひよっとして、足りないの？

水内 …。

美津枝 …。

美津枝、根負けして、大きくタメ息を吐く。

美津枝 …最低だわ。何でこんなことになったのかしら…。

しばらくして美津枝は男物の服を取り出して投げ出す。

美津枝 …。

水内 …。

美津枝 なによ。服がそんなに珍しい？ それ、宗介にと思って用意したのよ。別に

う持っても仕方ないんだから、アンタにやるわよ。

水内 なんだ？

美津枝 なんてってなによ？ アタシがそんなもん後生大事に持っても仕方ないから

アンタにやるって言うてんのよ。何か文句あんの？

水内 別にないよ。

美津枝 さつとしなさいよ、人の好意を無にするつもり？

水内 オレはここにいていいのか？

美津枝 どういう意味？ あんた、どうせ行くところないんでしょ？

水内 まあな。

美津枝 かくまったげるわよ。だって仕方ないじゃない！

美津枝、大股に退場。

水内、ぼう然とその場に座り込む。

## ACT・13 夢・娘・美津枝

夢。水内は座り込んだ位置で眠っている。  
美津枝とセブン。

美津枝 ねえ宗介。昨日の夜、大きな音したでしょ。

山田 音？ 何の？

美津枝 ガス爆発かなくていったじゃない。

山田 ああ。

美津枝 あれね、花火だったんだって。

山田 ふうん。

美津枝 新聞にもものつたんだってよ。

山田 風呂沸いてるぞ。

美津枝 六尺玉って言うの？ それが爆発して、花火師のおじいさんが死んじゃったんだって。だからね、その音だったんだよ、アレ。五尺玉だか六尺玉がね、爆発したんだって。それで七十歳のその道一筋っていう花火職人の人が、死んじゃったんだって。店の子が話してたの聞いて昨夜のことを思い出したの。遠くのほうでさ、ドーンて聞こえたじゃない？

山田 ああ。

美津枝 あれがそうだったんだなアって。

山田 そうか。

美津枝 ご飯は？ 食べた？

山田 いや。

美津枝 あたしもまだなの。食べる？ 何か作るつか？

山田 ああ。作ってくれ。

美津枝 あいよー。

美津枝、料理を始める。歌を歌いながら。

山田 女はいつも危ういところで身をかわす。それで私と彼美津枝は続いていた。危険を避ける本能が女には備わっている。女は私を愛していたのかもしれない。私はいえ、無論、愛など無かった。愛こそが最終目標だと公言してはばからない人々の気持ちは、私には分かる。私と同じだ。私も彼らと同様、訳も分からぬまま、犯罪に引きつけられ、乞食のようにそれを追い求め、その価値を立証するために身を投げ出す。まったく同じだ。たとえ彼らの方で、同じ扱いは迷惑だと眉をひそめられようとも。

美津枝 宗介。出来たよ。ものすごくすごいテキストにカンで作ったご馳走。

山田 ものすごくすごい。ってところが気に入った。

美津枝、食事を運んでくる。(無対象)  
しばらく食事が続く。

山田 美津枝。

美津枝 ん？

山田 今夜からしばらく家を明けるよ。

美津枝 …。またなんかするの？ やめてよ！  
 山田 金は自由に使っていいから。  
 美津枝 あたしもつれてって。

セブンは無表情に女をみる。  
 無言のままきびすを返し、女から離れる。

美津枝 まってよ！

山田 あばよ。

美津枝 足手まといになんかならないから。つれてってよ。

山田 もう足手まといだよ。

美津枝 あんたのいるところに行きたいのよ。あんたの仲間になるよ。あんたの女じゃなくていいよ。あんたが本当にいるところに行きたいのよ。あんたの中に入りたいのよ。あたしにも 賭けさせてよ。

山田 …。

美津枝 断らないで。私を受け入れてよ。もう、ここへ戻ってこれなくていいから。

山田 おまえは…。

美津枝 …。

山田 おまえには、あの黒い鳥が見えないんだ…。

セブン、退場。

美津枝、退場。

美香登場。

美香 なに考えてんの？

水内 ン。別に何も。

美香 ふっん。

水内 そこ座ると汚れるぞ。

美香 ン、平気。

水内、タバコの箱を取り出すが、空である。  
 箱を握りつぶす。

美香 タバコ、ないの？

水内 うん。

美香 買って来ようか？

水内 イヤ、いいよ。別に吸いたくないから。

美香 嘘、吸いたいでしょ。

水内 いや、いい。朝から結構吸ったから。

美香 どれくらい？

水内 10本くらい、かな。

美香 …おとうさん、少し禁煙した方がいいんじゃない？

水内 そうかな。

美香 一日何本くらい吸ってる？

水内 ン…2箱と、半分くらいか

美香 それって吸いすぎじゃない？

水内 そつでもないさ。

美香 おとうさんって、いつからタバコ吸ってるの？  
 水内 …いつからかな、よく憶えてない。  
 美香 高校生くらい？  
 水内 たぶん…そうかな  
 美香 中学でも吸ってる子いるよ。  
 水内 美香の友達でか？  
 美香 そう、ね。

美香、ちょっと警戒する。

水内、そんな娘を愛しそうに見ている。

水内 俺の時は中学で女の子は吸ってなかったな、たぶん。  
 美香 どうかなー。  
 水内 なんだい、どうかなって。  
 美香 女の子はそういうの隠すのうまいんだよ。  
 水内 ああ、そうか。  
 美香 おとうさんってそういうの、全然鈍そうだから。  
 水内 そうかな。  
 美香 そうなの。  
 水内 そうかもな。  
 美香 おとうさん、今までに禁煙したことないの？  
 水内 ああ、ないよ。  
 美香 しようと思っただこともないの？  
 水内 おまえが生まれたときに、しようと思ったな。  
 美香 へえ。でもしなかったの？  
 水内 うん。でもおまえが幼稚園に行く前は、家の中では吸わなかった。吸いたくなったら外に出て、一服して、戻ってはおまえの顔を見て、また外へ出て…  
 美香 大変だね。  
 水内 たいへんさ。でもな、外でタバコ吸っていると、すぐにおまえの顔がみたくなくなるんだよ。

美香、笑う。

水内 なんだよ？  
 美香 あたし、小学校の時にさ、おとうさんのタバコ、隠れて吸ったことあるんだ。おとうさんがいないとき、どんな味がするんだろって思ってた。  
 水内 どんな味だった？  
 美香 あんまりよく憶えてない。とにかくすごく気持ちが悪くなって、ベッドにうつすくまってじっとしてたのだけ憶えてる。そしたらおとうさんが帰ってきて…  
 水内 ああ、やっぱりあの時か。  
 美香 おとうさん憶えてるの？ 嘘でしょ？  
 水内 憶えてるよ。おまえが小学校3年の夏休みだったな。仕事から帰ると顔色真っ青なおまえが出てきて、おかえりなさいって言ったんだ。俺が、どうしたんだ具合でも悪いのかって聞くとおまえは、必死で首を振って、何でも無い何でも無いっていつてな。

美香 信じらんない。なんでそんなに憶えてるの？

水内 なんでも憶えてるさ。おまえのことなら。

美香 なんかわいいな。へたなことできないもんね。

水内 そんなことないよ。おれは美香のこと信じてるよ。

美香 隠れてタバコ吸っても？

水内 知ってたよ。

美香 ホントに？

水内 わかるさ、そりゃ。ケムリは残ってるし、においはするし。

美香 なんだ。知ってたのか。ずっと秘密にしていたなんか損しちゃった。

水内 そうか？ じゃ、いわなきゃよかったな。

美香 ねえ、おとうさん。

水内 ん？

美香 ママのことも、そんなによく憶えてる？

水内 ああ。

美香 美香のことと同じくらい？

水内 どうかな。

美香 思い出すこと、ある？

水内 いや、あまり思い出さない。

美香 そう…

水内、娘の髪をゆっくりと撫でている。

水内 ひとつ、想いだした。

美香 なあに？

水内 禁煙したことがあったな、一回だけ。

美香 なんだ、ママのことかと思った。

水内 だからママのことだよ。

美香 …？

水内 ママがまだ高校生だった頃だ。

美香 じゃあ、美香が生まれる前だね。

水内 うん。

美香 それがなんで禁煙と関係あるの？

水内 ママが大学受験の時だよ。おれはその時大学一年だった。ママが受験に失敗しないように、何か願をかけようと思って、それで禁煙したんだ。ママ大学に受かるまでタバコは吸わないって。

美香 へえー。それ、どのくらい？ いつから禁煙始めたの？

水内 思いついたのが、受験日の前の日だったから、合格発表まで正味2週間くらいかな。

美香 なあんだ。

美香、笑いだし、つられて水内も笑つ。

水内、笑う娘をいとおしそうにみている。

水内 それでもその時は苦しかったんだぜ。落ちたらどうしようって思ったな。  
美香 で、ちゃんと受かったの？ ママ。



水内 ママの頭が良くて助かったよ。合格発表の日一緒に見に行って、掲示板の前で服した。

美香 おいしかった？

水内 おまえと同じさ。頭がくらくらした。

美香 ねえ、おとうさん。

水内 …ん。

美香 もしさ、あたしが結婚するっていったらどうする？

水内 そりゃ、そのうちするだろうよ。

美香 今。いまするっていったら。

水内 おまえまだ中学生だぞ。

美香 だから例えは。

水内 そうだな…。相手の男を殺しちゃつかもな…。

美香は黙っている。

美香 あ、あれ見て。

水内 なんだ。

美香 ほらあそこ。………鳥。

夢から覚めると美津枝の部屋。

美津江 (登場)…なに考えてるの。

水内 …別に。

美津江 そればかりね、あんたは。

水内 …。

美津江 黙ってるか、何か聞いても別にとかまアとかそんな返事ばかり。いいかげんムカついてくるわ。

水内 …。

水内、聞いているような、いないような顔であらぬほうを見ている。

美津江 何とか言いなさいよ…。

美津江、ピリピリと痙攣を起こし始めている。

美津江 あたしに何か文句でもあるの？ アンタを連れ出したのはよけいなお世話だったワケ？

水内 …。

美津江 そうよね。アタシが間違っただけだ。別にアンタが逃がしてくれて頼んだワケじゃないわよね。

水内、黙って遠くを見ている。

美津江 アンタなんかオリン中にいようが外にいようが同じじゃないか。ただ黙って何か考えるだけ。なに考えてんだか知らないけどさ、ヘイの中にいたほうが良かった？ そうならそうと言いなさいよ。なによ…その顔は…

美津江、水内に食ってかかる。

美津江 こっち向きなさいよ！ アタシだってアンタのこと無理矢理脱走犯にしちゃったワケだから、そりゃ責任感してるわよ。だからこうやってアンタかくまって面倒みてんじゃないのよ。なにが不満なのよ一体！

水内 なにも不満なんかない。

美津江 じゃあなんだって毎日毎日面白くもない顔してボンヤリしてんのよ。一体その頭中でなに考えてんのよ。少しくらい考えてることアタシに喋ってくれたっていいじゃないよ。アンタなんか…アンタなんか…

水内 …

美津江 どうせアタシのことなんか眼中にないんでしょ。話したって仕方ないって思っ  
てんでしょ。

水内 …。

美津枝をいきなり包擁する。

美津枝 …。

水内 …こわいんだよ。

美津枝 …大丈夫よ。

水内 俺は、あの時、みたんだ…黒い鳥が羽を広げているのを…

美津枝 …。大丈夫。あたしも、見たから…。

水内 …。

美津枝 私にとっては宗介がそうだったの。きっと。だから、わかっただけじゃ怖くないわ。だから勇気を出して。逃げないで立ち向かって。逃げちゃだめ。それと向きあって、……………対決なさい。

美津枝は退場。水内残る。  
そこは夢で見た山頂である。

ACT・14 BB

BB (板東) 登場。

B B もしもし。  
 水内 はッ。  
 B B こんなところで何をしているんです？  
 水内 何も…ただ、待っているんです。  
 B B ははア、あなたもですか。  
 水内 他にも誰か、ここで待っている人が居たんですか？  
 B B ええ、たくさんね。  
 水内 たくさん？  
 B B そう、たくさん。だいたいね、待つのが好きなんですよね。みんなね。何かを待っている。口をあけて。親鳥が餌を運んでくるのを待つようにね。  
 水内 …あの。  
 B B なんでしょう。  
 水内 私はどうしてここに居るんでしょう？  
 B B …。  
 水内 私は誰を待っているんでしょう？  
 B B …。  
 水内 私は…誰なんでしょう…。  
 B B そういったことは、まあどうでもいいことなんじゃないでしょうかね。  
 水内 …どうでも、いい？  
 B B そう。完全に。たとえばここは私の部屋で、あなたがガスの集金人で、あなたが部屋的主人であるわたしを待っている、ということにしても、いいわけですよ。  
 水内 ガスの。  
 B B そう。あるいはここは家庭裁判所の待合室であり、あなたは奥さんとの協議離婚が不成立に終わって、これから裁判に望む若い夫であり、廷吏が呼び出しに来るのを待っている、ということにしたところで何ひとつ不都合はない。  
 水内 廷吏が…。  
 B B あるいはここが天にも届かんばかりの山の山頂で、あなたはその山頂を極めた登山家であり、そこで何か人智をこえた啓示を待っているということにしたいのならばそれはどうぞ御自由にと申す他にありません。  
 水内 人智ですか。  
 B B そう。  
 水内 どれもピンとこないんですが…。  
 B B ああ、そうですね。  
 水内 はア…。すみません。  
 B B イヤイヤ、別にあやまってもらうようなコトじゃないでしょう。  
 水内 …あなたは、誰なんですか？  
 B B 私？ 私はホラ、なんていうか、トンデン兵みたいなものでしょうかね。イヤ違うな。なんて言うかな。イヤ、トンデン兵は忘れてください。そうじゃなくて、そうだな、翻訳者のようなものか。

水内 ホンヤク？

B B あ、イヤイヤ、忘れてください。違うんだな。なんて言っただろつ。私はここに居るんですよ。ただいるだけなんだけれどね、まア、必要があつて、ここにいるわけです。まア社会党みたいなもんかな。自分じゃなにをするわけでもないですから。あ、イヤイヤ、忘れてください。別に特定の政党や特定の宗教と関係があるわけでもありません。ホントですよ。ホントですよつて言つととたんに嘘臭く聞こえちゃうのはどうしてなんでしょね。ホントに、ホントです。ますます嘘臭いですか？ 弱つたな。別にね、何かお祈りしたりビデオ見せたりアンケートとったりするわけじゃないですから。何をするわけでもないんですから。信じてくださいね。

水内 ハア。

B B あ、よかつた。イヤア、自分のこととなるとなかなか難しいですよ。要するに私は悪魔なんだけれど、とかく人つていうのは先人観を持ちやすいですからねエ。私は悪魔でございますなんて言つたらどう思われるか分からないじゃありませんか。

水内 アクマなんですか、あなたは。

B B え、まさか。私はそんなもんじゃありません。

水内 でも、今。

B B 大体ね、悪魔つていうのは外人でしょう、ねエ。神とか悪魔つていうのはアレは西洋の人が西洋の言葉で考えたものを日本語に訳してるだけであつてね。私はまア、翻訳家という職業柄、言葉の起源については多少ウルサイというか、気を使つてゐるんですよ。あんまりね、実体のない言葉だけをフワリフワリと浮かべているとね、自分の皮膚がね、どんどん薄く薄くなつていつて、最後には弾けてしまつてドロリと中身が流れ出しちゃうなんてことになつてしまつても知れない。ね。言葉は慎重に使わないとね。

水内 ああ、ではやはりあなたは翻訳の仕事を…

B B とんでもない。私はそんなもんじゃありませんよ。

水内 でも、今。

B B 翻訳つていうのはね、言葉を言葉に移しかえることですよ。言葉つていうのはこれはもう言葉つていうぐらいでね、魂が乗り移つてゐるわけですよ。人間にとつてはね、言葉は世界を征服する手段なわけですよ。わたしは嫌いです。ええ、言葉のない世界こそホンモノです。アナタも私と一緒に山に登つてみませんか。山はいいですよ。言葉なんていかにちつぽけで不完全なものが分かります。それはもう強烈なショックです。しかもそれをあらわす言葉がない。こわいですよ。こわいけど、それがいいんです。

水内 ではやはりあなたは登山家…

B B 違つて言つてるだろ！ この馬鹿！ 私が何ものかまだわからんのか！ この馬鹿！ 馬鹿馬鹿！ よつく見ろ。この私は…神だ！ 私は全てを見る。全てを聞く。全ての人間のおそれと罪をこの身であがなう。それが神だ。それが私だ。全能であり無知である。合掌。

水内 …。何なんだこの人は。

B B あなた、ひよつとして気が狂つてるんじゃないやありませんか。

水内 ハア？

B B 自分が狂ってると感じたことはありませんか？

水内 何でそんなことを聞くんです？

B B ということはあるんですね？

水内 別に…ありませんよ。

B B あ、いま、ちよつと考えましたね。あるんでしょう？ 実はあるんでしょう？

水内 ありませんよ。

B B 隠さなくてもいいでしょう。

水内 隠してませんよ。

B B またまた。

水内 隠してません。

B B 誰かに許してもらいたいと思ったことがあるでしょ。

水内 ないよ。

B B いつも不安で憂うつでしょ？

水内 ないっていつてんだろ。

B B あなたは今勢いだけで私の質問を否定しているでしょう。

水内 うるさいな。

B B あなたは今凶星をつかれてカツとして怒鳴ったでしょ？

B B …。あなたは今、さらに凶星をつかれて、もう相手にするもんかという態度をとる

ことで自己防衛に走っている自分を自覚しつつなすすべもなく黙っているんですよ。

水内 …。

B B 自分に正直になりましょう。

水内 正直に…。

B B そう、正直に。ありのままに…。

いつの間にか、精神科医たちが、二人を取りかこんでいる。

水内 俺はその時、本当は狂ったのかも知れない。

精神科医2 いいえ、あなたは狂ってない。あなたは。

精神科医1 おとうさん。お願い。お願いだから。

独房エリアの幕が落ちてゆく。

そこには囚人たちがいる。

水内 娘の相手が憎かった。それは確かだ。でも、本当にそれだけだったのか。俺には

今でも分からない。

精神科医4 何を見たの。わたしはそれが知りたい。みんな、同じものを見てる。おな

じ何かを。見ている。

精神科医3 みんな同じものを。

精神科医2 同じ何かを。

囚人たちは顔を上げる。

水内 必死で男をかばい、許しを乞う娘の姿が目には焼きついて離れない。あれは本当に娘だったのか。俺の愛した娘だったのか。

精神科医1 お父さん。お父さん。

精神科医5 思い出して。何を見たの。

水内 あの女は、誰だったのか。俺の娘だったあの女は…。

精神科医1 おとうさん、お願い。やめて。

水内 おれは…。

精神科医6 そしてあなたは見た。

水内の背後のBB、両手をゆっくり鳥のように広げ、首を絞めるために歩み寄る。

水内 おれは…

精神科医1 お父さん。

精神科医2 言って！ あなたは何を見たの？

水内、振り返る。

BB 私が何に見えますか？

水内 あなたは…私に、見えます…。

BBは踵を返し、ゆっくり独房エリアへ戻ってゆく。

水内その場で動かない。

## ACT・15 外へ

BBが戻ると囚人たちは静かに囚人服を服を脱ぎ捨てる。

精神科医たちは役目を終えたようにゆっくりと崩れ落ちていく。

囚人たち、囚人服の下にはそれぞれ明るい色のシャツと、淡い色のスラックスを付けている。

囚人たちは静かに囚人服を脱ぎ捨て、生まれて初めて空を見上げる人のように空を見上げる。

落ち着いた足取りで、彼らは歩き出す。彼らの目に映るもの全てが、風に吹かれて

いる。

囚人たち（今や普通の服を着た普通の人々）が立ち去る。

風の音。そして風の音に乗って、女の子の音が聞こえる。

それは、床に崩れ顔を伏せている精神科医たちの声でもある。

精神科医1 …おとうさん…おとうさん！…ねえ、いい天気だよ…

水内、顔を上げない。

精神科医6 おとうさんったら。……どっかいこうよ。気持ち良いよ、きつと…ねえ、

おとうさん…

水内、変わらず身動き一つしない。

精神科医4 おとうさん、寝てるの？ すごくいい天気なんだから、ちょっと見てしら

んよ。こんなに青い空、見たことないくらい。

風の音には、そよぐ樹々の葉の擦れ合う音や、遠くの街のぎわめきが混じり合っているようにも聞こえる。

精神科医3 ねえ、おとうさん、…外に出てご覧よ。どこか行こう。きつと、気持ち良

いよ。…ね、外に出ようよ。

女の子の声途切れ、ややあつて

精神科医2 …なアんだ、おとうさん、いないの。……。

風の音は止んでいる。

水内、ゆっくりと顔を上げる。

立ち上がる。

そして、きびすを返し、去っていく。

精神科医たち、いつせいに、同時に顔を上げる。

精神科医たち おとうさん！

水内、その声にふと立ち止まり、振り向く。

風がまた吹き始める。

幕。(1993.11)